

二〇〇七年に京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻を修了した田中奈津子(たなか・なつこ)福岡・一九八二)は、在学中より個展やグループ展などに取り組みなど、現在までに精力的に制作・発表活動を続けています。

当初、身近な日常の中で不意に得たイメージを膨らませ、それらをモチーフに絵画・版画のテクニックを組み合わせた絵画制作を続けていた田中は、二〇一五年より包装紙や広告・カレンダー等を素材として、毎日「壺」の絵を描くことに取り組み始めます。

これは、それまでの制作が田中の自由なイメージ・様々なテクニックによるものであったのに対し、壺という制約、日々描き続けるという制約を自身に与える行為であるといえ、田中はこの制作をおよそ一年に渡って続けています。

初期には壺を「描く」ための思考や、絵画としての画面づくりへの意識も強く、制作スピードを得るためにも「ラージ」技法を多用していたその制作は、次第に技法や素材を限定しないものとなり、画面にはその日その日の変化が多様に現れるようになります。

ラフに筆を走らせた日、手によってつくられた壺を思い、手だけで描いた日、自身の作品の切れ端や事前に準備した素材を用いた日、細かな「ラージ」を重ねた日、ボールペンで走り描いた日など。当初の田中の制作姿勢が「絵画にすることであったとするならば、その後の制作はあらゆる技法や素材を用い、様々なアプローチによって「絵画をする」ものであるように見受けられます。そして画面に起こる変化は田中の絵画に対する思考やアプローチの変遷として見ることもできます。

自身の感性に強く頼るのではなく、五感、記憶や経験、感情や体調、身体や道具、時間などのあらゆる要素を手がかりに続けられた「きょうの壺」の制作は、田中にとっぴつしか自由を封じる制約ではなく、自分自身にかかっていた制約を検証する機会として、あるいは自身を支える「芯」のようなものとして位置付けられることとなります。

本展では二〇一六年十二月十五日から年を跨いで、二〇一七年一月十五日までの三十二日間(一ヶ月)の計算を間違えていたために渡って、田中が毎日「絵画した」痕跡である、「壺の絵」を展示いたします。

展示された三十二点の「壺」は、確かに毎日の連続した取り組みの結果であると言えますが、それが昨日(過去)からのイメージの引用や、テクニックのバリエーションに陥ることなく、「つひつひつ」の「絵画」として独立しているのを見て取れます。これは田中が毎日「ゼロに戻る」こと。そして、そこから毎日「絵画をする」ことに真摯に取り組んだ記録であるといえるのではないのでしょうか。

田中奈津子 TANAKA Natsuko

同じ道、一步のたびにみえるものが変わる、風景画は苦手だけど、なんだかそういう絵だったら描けそうな気がしたわって、雲の隙間に言ってみる、声は何色か知らないけど空の青に消えちゃった、でも石の形になってなんか落ちてきた、これ投げつきたい、わたし後ろに手を編んでいるのよ、編み目のあいだからなんか染みてるでしよう？ 地面まで染めたいわ、どこまでグラデーションにしたいですか？ 質問は転がった、先生は箱の中に入れていたからあれは似てる人、似てる人の顔描けます！ 貼ります！ いやですか？ 心当たりがあるんでしよう、痛いんでしよう、彼に野線を引く、彼女に球体を持たせる、ふたりのあいだは風だか時間だか、測らないでね、猫のように眠りたいんだってね、言っていないけど、大丈夫結ぶから、もっとこっちで話そう、ことばを分けて、並べ替えよう、八行はわたしの、力行はあげる、あとは売ろう、お金になるかな、どんなお金、食べられたらいいのにな、何味でいつ美味しいかなあ、焼いたほうがいいのかなあ、誰かに作ってほしいな、そしたら口以外で食べられる気がする、歯はもういらないね、あたし病気になるっちゃう！ 誰がお見舞いに来てくれるかなあ、嫌われちゃうかなあ、犬連れて来てほしいな、トイツっぽいドールの白と黒、灰色はつくるよ、なかね、ちよっと温度が違うんだよ、適温なの、差がないの、溶けちゃうの、いなくなっちゃうの、悲しい、ちゃんと日記に書かなきゃね、あなたも書かなきゃだめよ、待ってるわ、日光を避けて、約束は捨てないで、約束してないことも捨てないで、頭われそう！ 言い訳ばかりで、ごめんなさい、でも許して、わたしにも他人にも許して、あなたにも許して、きょうはもう二度とこないから、壺のなかに満たして、根のある花を咲かせましよう

「なぜ壺なのか？」

きょうの壺をはじめから、散々「なぜ壺なのか？」という質問を受けた。当初は、正直に、ただ毎日描くに耐えうる形を持ったものであればなんでもよかった。毎日の表現の振幅を測る、ポーターラインとしての役割をしてくれる存在であれば、

抽象への助走、具象への最後の執着として、ミニマルな形態でも「目見たただけ誰でもその用途まで想像できるともよいモチーフだった。2015年紙おろす一年間、主に身の回りの生活の中で手に入る包装紙等の素材を使用して描き続ける中で、制作方法は多様に變化していったが、一つだけ残った絶対条件は、「壺の形を切り抜く」ということだった。壺の形を切り抜く時、まるで世界からわたしの輪郭を明らかにしていくような感触があった。毎日わたしが目覚め、きょうを描き、寝床につくように、平面の中に収まる。わたしが日々を生きていること、きょうの壺の制作が同一平面上で交わり、絡まりながら、絵を編んでいく。「きょうの壺」プレミアムの制作では、「生きて、描く」のか、「描いて、生きる」のか、また「現実があつて虚構があるのか」、虚構のために現実があるのか、原因や目的や結果といったものが織り混ざって乱れ、「ただ、描く」ということだけが確かだった。ある時は壺が自分の身体のように見え、ある時は世界や私を閉じたり開いたりする鍵穴のように見え、ある時は満たすことのできる空洞、ある時は素材たちの待ち合わせ場所、ある時は全くの間、ある時は別世界、ある時は他者、ある時は壺それ自体に見えた。

「なぜ壺を描くのですか？」という問いには未だ「ただ壺を描くのです」という答えしかできないけれども、ただ壺を描くことの中で見えてくるもの、それを見るためにただ壺を描いているのだ。

「1ヶ月の絵、1日の絵」

作品を制作する時、大体の完成図やプロセスを設定し、その間に遭遇する偶然や必然に導かれながら、任意のある地点で「完成」とする。仮にこれにかかる期間を1ヶ月としたら、その1ヶ月間、「完成」を目指し、「完成」のためにふる舞う。1ヶ月のための1日になる。「きょうの壺は1日の絵だ。1日は1日のためにあり、それ以上でもそれ以下でもなく、ただ1日は1日で終わる。1ヶ月の一枚の絵と、三十一枚の1日の絵。その質量の総和に差はないと思う。ただ、1日の質感が全然違った。

「光と影」

ありあまる光のもとでは形の欠けた花が咲くだろう。あまりに暗くて樹の大きさが分からない。どちらも過ぎれば、まるで見えなくなる。光も影も、時間とともに交替していく、その循環がきょうという日の形を作る。二つが共に存在している間だけ、私たちは物を見ることができる。

「図と地 || 私と世界」

今まで、無意識に壺をフレームに収めてきた。壺の絵を描くことは、初めから図と地を免れ得ない構造だったし、図と地のシンプルな組み合わせ、シンメトリーの構図は「一周回って絵画の根本に立ち戻ったよう」で、気に入っていた。しかし今回はその関係性に対して検証的、能動的でありたくて、あえて壺の形それ自体をフレームとして設定した。フレームの中に、「きょう」の思い出が満たされていくような感覚だ。そしてそれをさらに縦横のフレームに収めたくなった時は、そうした。

図だけの絵、必要ならば地の中に図を収めた絵。洞窟から始まり、壁や窓、襖、建築物の中に納まり、そこから独立して紙やキャンバスへ描かれるようになった。戦略的に四角以外に描かれることもあったけれど、縦と横の線に囲まれた平面の中に、描きたいものをいかに収めるかは、

ずっと続いている絵画の命題の一つである。それ自体がフレームである壺をさらに縦横のフレームに収めるとき、私の中で現在完了したものかたりを絵画、美術という枠の中に収め、私から引き離し、世界の中に現存させる、表現活動それ自体の過程と重なる感触があった。

「見る、と、見られる、の間のこと。」

知覚することは、世界から受けとること。考えること、感じること、想像することは私の内部で、受け取ったものを結ぶこと。描くことは、結ばれたものに、色や形塗りや線によって、輪郭を与えていく作業。初めから最後まで意識的に行われることもあれば、無意識に預けてみることもある。時にそれは、色や形、造形の道具それ自体によって、形作られることもある。言葉以外のものを表すためであったのに、言葉によってその骨格が組まれることもある。描くためのシステムであったものが、システムそれ自体が絵を生むようにもなる。様々な変容の過程を経て、描かれたものを、他者の視線の間に差し出す。見る、と見られる、の間のこと。

「思い出系絵画」

毎日壺の絵を描くので、意識がある時間は、もしかしたら意識がない時間でさえ、どんな壺にしようか考えていた。その日見たもの、考えたこと、知覚したもの、他者と交わした言葉、その時聴いていた音楽、事前に準備していた素材、そついったものに支えられて描いた。描いている時だけが絵を成り立たせているのではなく、それ以外のすべてがそこに結ばれる。今日に句点を打ち、やがて毎日の読点となる、その日にかいながった私と世界の思い出の絵画。

「何かのためではない絵画」

宗教や思想のためでもなく、お金のためでもなく、絵画それ自体のためでもない、わたしのための絵画が描きたい。描くことに目的はなく、目的語と動詞は結ばれて、「絵画する」という動詞になる。そしてその絵が、あるいはその制作の在り方が、他者に繋がっていければ、と祈るような気持ちでいる。私の母はずっと誰かのために生きてきた。姉になり、保育者になり、妻になり、母になり、今は祖母の世話をしている。ずっと他者に手を差し出す生き方をしてる。確実に誰かの役に立っているのに、彼女の名前が表に出て何か形のある賞賞を受けることはないだろう。

私の母だけではない、この世界には無記名の贈り物が、いたるところに捧げられている。それに比べて自分の名前を前面に出し、他のためでない、わたしのための絵画が描きたい、などと仰々しく言っていて、何の役にも立たないものを、堂々と人前に並べることのずうずうしさ。でも続ける。何かのためではなく、ただ、ありがとう、と言って、世界を見て、描いて、おくりかえす。

略歴

- 1981 福岡県北九州市生まれ
- 2005 京都市立芸術大学美術学部美術科油画専攻卒業
- 2007 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了

個展

- 2002 WORLD /岡田屋本店ギャラリー(三重)
- 2004 The golden time in Cambodia /GALLERY ANTENNA(京都)
- 2005 水辺の人 /GALLERY ANTENNA(京都)
- 2006 孤島群 /複眼ギャラリー(大阪)
- 2007 キヤラリー Den 58(大阪)
- 2007 京都市立芸術大学作品展第三会場学内展
- 2009 私湯 /MEM(大阪)
- 2011 デコレーション /アトスペース 虹(京都)
- 2012 豊かな絵 /アトスペース 虹(京都)
- 2013 Fantasy for Adults /アトスペース 虹(京都)
- 2014 わたし壺世界 /アトスペース 虹(京都)
- 2016 繋ぐ、結ぶ、続く、絵 /アトスペース 虹(京都)

グループ展

- 2003 現代美術 /インディペンデントCASO展
- 2004 グループ展「ひと展」 /京都市立芸術大学大ギャラリー /日本カマラ祭 /三ノ木町旧新聞配達所
- 2005 山本恵と2人展「花と人」 /ポーターレスアートギャラリー /NONOMA(滋賀)
- ローリー・ヘンクス人展「ANOTHER STORY」 /GALLERY ANTENNA(京都)
- 2006 GENSE ART EXHIBITION /建仁寺禅居庵(京都)
- 2007 作品中 /galerie 16(京都)
- in my room /FLUGAN GALLERY (大阪)
- 58号室展 /ギャラリー Den 58(大阪)
- ART AWARD TOKYO /行幸地下ギャラリー(東京)
- 2008 インディペンダントの恋人 /海岸通ギャラリー CASO、MEM(大阪)
- 2010 京都オーブンスタジオ
- 2012 「あれから、そして、これから」 山本俊夫、藤原康子、田中奈津子 /ギャラリーモーター(京都)
- ついでにみたかったもの /CAFÉ PULLPO(京都)
- 2013 「悦ばしき知覚」 関口敦仁、山部泰司、松井沙都子、田中奈津子 /galerie 16(京都)
- 2014 ついでにみたかったもののおみせ /同時代ギャラリー /スタジオ1928(京都)
- 2015 掲示板アート /片瀬繪香、山本恵、田中奈津子 /高尾小フエ2015(京都)
- 2016 二人展「SPECTRA」 鷹木明、田中奈津子 /ギャラリー恵風(京都)

受賞

- 2015 きょうの壺 マネックス証券Art in the office 2015 審査員特別賞

制作日記
【2016年12月15日～2017年1月15日】

2016年12月15日

仕事が終わってから、岡崎を抜けて、住宅のひっそりとした小道を抜ける。

ちよっと時代には遅れてるけど、ちいさく洒落た出窓のある家。フランスの装飾物、小瓶のコレクションが、内側からの光を受けて、この夜、白いカーテンのスクリーンに、こ気味よいリズムの、影のような、形のようなものを映す。これを描いてみようと思う。制作しながら聴いていたパガニーニのヴァイオリンはあまりにも色っぽく艶っぽく、なんだかやっぱり色っぽい形の絵になってしまっう。

12月16日

昨日描けなかった光と影のリズムのことが心残りでも、ういちど記憶でチャレンジしてみる。

鎮静の青、絵の具で描らす。グールドのムーンライトソナタが流れ出したとき、背景に黄色のかたまりが見えた。結局あの出窓の光と影ではなくなってしまうたけど、ま、いいか。

12月17日

ワグナーをどっぷり聴きたくなって、気合いをいれて百万遍まで歩き、ハンバーグを食べて柳屋堂へ。トリスタントイゾルデ、内省的で、抑制をこえて滲んでいるような音。でもうちらかといつか、五感を開放しっぱなしの劇的な方が聴きたくて、アトリエでタンホイザーをリビートしながら、禁じられた愛の舞台を想い、描く。

12月18日

アトリエに行く前にユングの本を読んでいたら、頭の上の方をつがいの大きな魚が泳いでいるような気がした。そのままそのイメージをアトリエに持ち込んで、まず魚の形を切り抜いた。なんとか力技で仕上げたけど根本的にビーチブラックとシアンブルーの相性が悪い気がする。でも最近色彩感覚がバグってきて、これでも良いような気もしてる。

12月19日

昼間アトリエの整理をしていたら、ずっと前に買った百人一首や花札に使われている赤い紙がでてきたので、今日はこれで何か作ってみようと思う。一番初めに、平安神宮で見た、細く流れる木の枝の線を描いた。

12月20日

シユタイナーの超感覚的世界の知覚を想像してみる。また、エーリッヒフロムの「愛とは人間のなかにある能動的な力である、人をほかの人びとから隔ている壁を打ち破る力であり、人と人をつ結びつける力である」という言葉。

ぼっぼらに割れたあいたから、あまりある光が溢れている様子を想像する。

12月21日

授業が終わってから、天気がよくので天王寺まで歩いて、線路沿いの、ビルワンプロアおち抜きのおしゃれなカフェでひとランチをする。隣の女子二人が、アパレルの仕事をしているようで、髪の毛から靴まで、拔かりなく、抜いたようにおしゃれ。のあと古川に行つて、何を相談しようかなあ。そのあとMIOに行こうね。

この人たち、自分の輪郭の周りを飾ることに関してはすばらしい技術と情熱。でも考えをうつことはめんどうなんだ。

一方わたしは、内側をいかに豊かにするかについては、ずっと取り組んでいるつもり。

ふと、この人たちと私が合体したら、完璧な女ができるんじゃないかと思つた。

12月22日

仕事が終わって、どうにもやる気がおきず、思わずビールを飲みに行つてしまっう。酔い覚ましに寝て、起きたらもう深夜だった。

表現することなく何もしたくない、というリヒターの言葉、いつもこういう時に思い出す。

描くことを、最も自分の速いところへ手離したくなる。自分が最も苦手な色、深緑を塗るところからはじめてみる。続いてコパー。

能動的な描きなんてしたくない、壺を真ん中で折つて、転写する。敷いてあった新聞の宝塚のステーション写真を貼つて、そこから色を拝借する。最後に黄色、全て打ち消すように。

12月23日・24日

仕事納めして、DM用の撮影をしたらべつたり疲れてしまった。百万遍でハンバーグを食べて、寝る。起きたらほぼ朝方、もう今日じゃない、明日がはじまっている、どうしようかな、と思ひ、いっそ今日と明日の境界がない絵を描けばいいじゃないか！。

紙二枚をくつつけて、金と銀の壺を同時に描く

12月25日

インスタグラムみていたら、恋人や家族のクリスマス写真だらけで、毎日壺の絵のことがかり考えてて、現実の時間の流れと解離してる。

世界に失恋しような気分。せめて、クリスマスツリーっぽい壺にしてみた。イリュージョンによってリアルを取り戻すの。

十代のとき、窮屈な学校や、家族から離れて、私の部屋に閉じて、一人で絵を描いていたときや、音楽を聴いたり本を読んでいるときだけが、世界が開放されている気がしていた。あれと似てる。またその延長とも言える。

いまは家族に感謝しているけど。今日で三分の一終えた。

12月26日

Twitterみていたら、あまりにもたくさんさんの発言がんで自由に育っていて、言葉の荒れ野のような感じがした。その言葉は消えずに仮想世界に残っているのだと思つたんなかぞつとする。水彩絵の具を浸透させた上に、フレームを聴きながら、音楽にあわせて線を引いていへ。言葉が奔放に眩かれるイメージ。即興的な線だけじゃ自信がなくて、その上からまた絵の具をぼかしたり、もう一度描いたり。最終的にまとめたけど、いつたい何がしたかったのかな、いつたいこれは線の絵なのか？

12月27日

昨日の線の問題が気になっていて、もういちど向き合つてみる。パガニーニの24のカプリースを聴きながら、線を引く。それらを張り合わせて、なじませるために上からうすく青を混ぜたジェルメティウムを塗る。青色鉛筆で壺を描く。これは線の絵と言つていい、でももう壺じゃなくても良くなつてきている気もする。これが抽象のはじまりなのだろうか？

だいたいいきょうの壺、自体が、わたしの中の抽象の萌芽のようなものだった。壺にしたのは、特に意味はなく、具象への最後の執着、って言うていた。

でもこれだけ壺の絵を描いていたら、やっぱりなんだか関係性のなかで、意味や役割が出来てきた。そこを確実にした絵。

12月28日

昨日のお酒がすっかり残つてなんにもやる気がしなかった。。

能動的に選択したり、最終的にいつつしたいとか、とにかく描くことにまつわる判断を司る部分の脳が全く動かない。思い切つて物質にゆだねてみる。

金の上に遅乾剤を混ぜたオレンジを塗つて、持つてるアクリル用の全ての筆で引つ張る。当然ながら最後の方はオレンジがあまり動かない。それはそれで良しとする。いや、待つて、それじゃどこかの誰かの方法と変わらない気がする。

そこに、別に描いていた筆跡を張り付けることで、なんとか私らしい絵を構築する。

誰のものでもなく、宗教やお金や、絵画それ自体のためでもない、私のための絵画を描きたい。

12月29日

一昨日の話をしている、記憶が全く欠けている部分があり、怖くなる。脳のなかからある部分を切り取るイメージ。壺に勢いで筆を揺らし、その跡を形として切り取る。そこに色を嵌めていきながら構成する。欠落こそが魅力だったりするという恩師の言葉を思い出す。

12月30日

欠落以外の部分、つまり、あるとされているものからはじめてみたくなる。

昨日の欠落部分をトレスして、それ以外の部分に別の紙を嵌めてみる。着色してみる。物足りないので、昨日は欠落として切り取つた筆跡を貼り付けてみる。

なんだか言語で整理すると、あるんだか無いんだかよくわからない話だけど、絵の中ではほとんどん進んでいく行程。やっぱり言葉と絵画は違う。

12月31日

2016年最後の日。なんとか紅白少し見れそう。2016年をふりかえつたら、自分の輪郭や、頭のなかで分け隔てていたものがゆらぎ、他と浸透しあつたり、攪拌された一年だったよつな気がする。

感謝をこめい。

2017年1月1日

描き初めなのでうわつと体を動かしながら描きたくなる。紅白で宇多田ヒカルに感動して、昔のCDを引つ張り出す。キャンバスを引き出して、大きな刷毛で、今日見た空、年賀状、平安神宮の朱などの色を広げていく。色彩と触感によって描き倒した絵。今年のはじまり。

1月2日

昨日一日でキャンバスに描いたせいとか、きょうはなかなかテンションが上がらなかった。読んでいた本から、なにがあるうとも決して揺るがない存在の絵が描きたくなる。図と地をはっきりと分けてみる。レイヤーも、色彩も。ストロークは風、風はあいたを吹き抜ける。

1月3日

まだ正月でいつもの店は閉まつてて、銀閣寺あたりまで歩いて、カフェでカレーを食べて、コーヒーを飲みながら読書していたら、内面世界と外界の話のあたりであわつと涙がでてきた。だいたい、きょうの壺をはじめてから、ずっと感覚、感情がとりこめなく湧いてきて、毎日泣いている。なんかの行みたい。

自分と世界の境界に感覚器官があり、それを通して世界を感じ、内面に結ぶ涙が出るとき、世界と自分との境界を滲ませたいんだと思う。

1月4日

寝ても寝ても異常に眠い。意識もさえない。風邪をひきかけているのかも。どう描いているのか、アイテアも浮かばないので、ストップしてある紙やドローイングを組み合わせているうち、ピンとはまった。多分自分で一から描いたなら絶対にそうはしないであろう組み合わせ。きょうの壺をはじめた時のシンプルな部分に戻つた気がする。図と地をはぐらかしたくて、背景を不定形に切つて、図が地を背負つてるようなかたちにしてみる。あまりうまくいっていない気がするけど。

1月5日

仕事のはじまつて、制作にかけられる時間が少なくなつた。昼から、きょうはどんな壺にしようか考えていて、そういえばまだ、壺と、その背景の、大きさの関係に対するアプローチが少ないの思い出した。アトリエへ行き、机を片付けたら、仮眠して、目覚めたら地面に敷いた大きな紙に感覚で水彩絵の具を伸ばす。そこへポンドでフィンガーペイントした壺を配置。新しい世界、彼方へ行つてしまふ人の背中を引き留める感触がした。

1月6日

きょうも昼からどうするか悩む、昨日のポンドを引つ掻く感触が指に残っている。そういえば、わたしの身体は、生まれたときから、家族や友人や恋人に触られて、形造られてきた。タッチ＝触感。

1月7日

萬屋書店の人工知能ロボットに、ダンスのプログラムが入っているようで、欧米人の男の子が、対面してそれに合わせて踊っていた。おじいちゃん、お父さんは、はじめずっとそれを見守っていたが、彼があまりにも熱中して、踊りも止めないので、たまに見にくる程度になった。

二時間くらいいたけど、その間ずっと踊つた。人にどう見られるかとか、鏡に映した自分の動きを確認したりとかなく、ただただ踊っていたのである。なんだか当てられてしまつて、こうしよう、とか考えて作るのがバカらしくなった。

感覚的に、合つたなあと思う紙数枚、キャンバス一枚を合わせて、無造作に垂らしてみた。

1月8日

アトリエへ行く前、インドカレーを食べていたら、お金持ちそうなお家族の、ちいさな男の子が、「あんなー恐竜と人間は仲間やねえっ。」

なんだか時間とか生態系とか、いろんな層を超えて、そういえばそれも成り立つ感じが不思議だった。「仲間」という言葉で繋げば、異なるもの同士でも「仲間」になるのである。わたしと、あなたも。

1月9日

アトリエに行くまでにみた夕日のグラーションが本当にきれいだった。沈む前は黄色から朱、沈んだら青から藍色へ。色彩と時間が共犯でグラーションを起こす。雲はまた違う層で、形を変えながら、自由に流れていへ。

1月10日

アトリエに行く前に寄つたカフェで、インドの神話の版画絵本を見る。シンプルでプリミティブなイメージの絵が、すごく心に落ちてへる。壺が登場する場面があり、そつだ、壺は土を焼いて出来ているんだと今さら納得。

1月11日

昨日に続いて、壺が燃えている様子を想い、描く。以前に切り抜いていた紙が役に立った。

1月12日

仕事が大バタバタして、日中に考える時間が無く、明日も仕事と思うと、制限時間の中で描くしかない。一瞬泣きそうになる。

正月前後にそのためだけに一日中時間が使えたとき、感覚、感情の源泉のように流した涙とは全然違う。

でもこれも必要なだろう。ラウエルのポレロを聴いていたら、なんて洗練された構成で、洒落た音楽！と思ひ、モダンテクニク(構成と色の力)洒落を拝借して、描いてみる。

1月13日

きょうも昼間に考える時間がなかった。CDのなかで、しばらく聴いていないドヴォルザークの新世界よりをかける。

きょうの壺の制作に入る前に、なるべく友人に会つて、それぞれいろんな話をした。そのなかで、私たちはいつも不幸を、意識でも無意識でも、瞬間瞬間に選択している、選択次第でいつでも世界は変えられる。という会話を思い出した。その時は気になる程度だったけど、後で考えてよく分かるよつな気がした。

現代は、思つた私にも、思われぬ私にも、すべになれてしまつた。いろんな色、筆跡の、バイカラーの組み合わせで埋めて、隙間をさらに白と黒で仕上げる。無限の二択の組み合わせ。

1月14日

もてあどどどしかな。まだやつていなかったことを考える。上下をひっくり返すこと。壺を逆さまにした、そこから水が溢れているよつなストロークを描く。壺の中に、海があり、それが溢れているように見える。これ、壺中に天地創造しているよつだ。

よつこんで、天地をひっくり返しながら、描いた。私は神かなあ。

1月15日

雪が積もつて、すべて等しく上半分が白。なんだか修正液で消されているみたいだな、と思つ。世界の上半分が無い。はつと気づく、いつも通る道の敷石の色、植え込みの植物の葉の形、あの家の屋根の質感、、、消されてしまえば、全く思ひ出せない。

むしろ半分が見えなくなったことで、その存在を意識した。

私はいつも何も見えていない、見えなくなる、あまりある贈り物が。

もつとよく見て、よく感じて、よく味わひ、毎日をよく生きていよう。あらかじめ与えられている。